
現代の錬金術

縄跳び

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代の錬金術

【Nコード】

N9306P

【作者名】

縄跳び

【あらすじ】

私……タカハシの親友ヤスハラから久しぶりに連絡があった。なんでも折り入った話があるようだ。イズミと一緒に帰れないのは残念だが親友のためだ。仕方がない。

ヤスハラの話

今日は私にしては珍しくイズミと一緒に帰らない。イズミにはまだ講義が残っているということもあるが、それだけならいつものことなので講義が終わるまでどこかで時間をつぶして待っている。今日はそれだけではない。十年來の親友……ヤスハラが折り入って話があるから一人で大学から最寄りの喫茶店に来てほしいのだそうだ。

この喫茶店、アンティークな食器やテーブルで整えられており雰囲気もそれに合わせてあつてなかなかお洒落で学生には人気がある。が、私は行ったことがない。イズミ曰く、「コーヒーは苦いからや」だそうだ。私も喫茶店に一人で粘る度胸はないので近くのコンビニで立ち読みをしたり大学内をうろついて時間をつぶす。イズミのゼミの研究発表に潜り込んだこともあった。

ヤスハラは大学には行っておらず既に働いている。イズミと知り合ってから他は友人達と同様、疎遠になってしまっていたが元氣そうでなによりだ。あいつならどんな仕事をしていても上手くやっていけているのだろう。そんなことを考えながら喫茶店で十分程待っている。ヤスハラがやって来た。あいかわらず時間に正確な奴だ。

「久しぶりだな。」

と私が声を掛ければ

「ああ、そうだな。」

と返事が返ってくる。無愛想なところは変わっていない。あと飾りつきのない服装も。無地で薄手のＴシャツにジーパン。今の季節に

喧嘩を売っているようなスタイルは私には到底真似できるものではない。顔は昔と変わらずイケメンだ。それなりの格好をすれば歌って踊れる某事務所にも入れるのではないか。

「それで？話って何なんだ？」

無愛想なヤスハラのことだ、「そうだな。」以外の返事が返つてくるとも思えない。挨拶もそこに本題に入る。

「俺に殺人の容疑が掛けられている。」

「え？」

……突然のことで上手く返事ができなかった。今日は四月一日ではないはずだ。

「俺に殺人の容疑が掛けられている。」

「お前、人を殺したのか？」

自然と小声になる。どうやら重い話のようだ。

「違う！俺じゃない！」

ヤスハラは叫んだ。

「し、声が大きい。わかってるよ。お前はそんなことをする人間じゃない。で、私に何か協力できるのか？」

実際に私に何ができるとも思えない。しかし今のヤスハラ不安を

和らげてやるくらいはできる。お世辞にも似た一種の慣用句のような返事を返すとヤスハラは私が言い終わると同時に

「真犯人を見つけて俺の無実を証明してほしい。警察は俺が何を言っても信じようとしらないんだ。」

と声を被せてきた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。そんなことに私が首を突っ込めるわけがないじゃないか。せめて法学部とかの弁護士目指してる連中に相談すべきじゃないか？」

そつだ。私は弁護士を目指してはいないし法学部ですらない。立派な工学部だ。いや、立派は言いすぎた。とにかく、そんな方向には協力できない。

「その方面にはもう相談したさ。今は泥船でもなんでも頼りたい気持ちなんだ。」

（私は泥船か……）

つまりヤスハラは本気で私にどうこうしてほしいわけではないのだ。そこまで馬鹿ではない。具体的には本気で私に何とかできると思える程馬鹿ではない。そう考えればいくらか気が楽になった。代わりに私のプライドに火がついた。意地でも首を突っ込んでやる。

「お前は頭が良かったからな。もしかしたら専門外でも何とかしてくれるんじゃないかと思つてな。」

「……まあ泥船なりに考えてみるよ。」

今私という泥船が燃えている。

「じゃあ頼んだぞ。もちろんここの支払いは任せてくれ。」

私にどれ程の期待をしているのかわからないがヤスハラは嬉しそうに席を立とうとしている。

「ちょっと待て。」

「どうした？」

「どうしたじゃないだろう。その事件について話してくれないと。」

何も分からないままでは何もできない。泥船にも意地というものはあるのだ。しかし残念ながらヤスハラは人は良いがやや頭が悪い。まさかこいつ、いままでの相談相手全員に同じことを言われてるんじゃないだろうか。

「そつえばそうだな。じゃあ手短に話すぞ。」

「詳しく話せ。」

（本当にこいつは……）

「ん？わかった。少し長くなるが勘弁してくれな。まず殺されたのはヨシナガレイコ。女性だ。俺の元カノでもある。」

「お前元カノが殺されたのか？」

（よく平然としていられるな。）

「ああ、そうだな。今の彼女だったらこんなに落ち着いてなんかいられないだろうな。だが今は他人だ。それで、殺された場所だがレイコの自宅だったそう。首を絞められてリビングで死んでいたんだとさ。あと睡眠薬とかは出なかったんだと。部屋が荒らされてたり暴れた形跡がなかったから知人による怨恨目的で、残っていた靴の跡から単独犯で男らしい。」

「靴の跡なんて証拠になるのか？」

犯人が女性であつても男物の靴を履けば誤魔化せるではないか。

「知るかよ、そんなこと。ともかくそのおかげで知り合いで男で元彼の俺が疑われたんだ。元彼だったからわかるがレイコはいい女だったよ。人当たりはいいし気配りもできる。何より美人だ。誰かの恨みを買つような女じゃない。」

「じゃあなんで別れたんだ？」

「浮気だよ。今の彼女と浮気したんだ。」

「お前最低だな。」

ふと私とイズミの關係に当てはめてみる。……あり得ない。お互いに浮気ができるような關係ではないのだから。

「うるせえ、ほっとけ。不倫は文化なんだよ。死んだ日時だが三日前の午後六時頃だそう。」

「その時間お前は何をしてたんだ？」

「ゲーセンで遊んでたよ。だがそれを証明できる奴がないんだ。」

「浮気した天罰だな。」

「ふん。事情聴取で刑事が言ってたことはそれくらいだ。じゃあよろしく頼むよ。」

「ああ、丁度試験も終わって時間もあるし頑張ってみるよ。泥船なりに。いや、待て、今の彼女の連絡先を教えておいてくれ。」

「ん？どうするつもりだ？」

「いろんな人から話を聞かないとな。」

「なんだ、そういうことか。ほら、これが携帯の番号だ。間違っても手え出すなよ？」

「出さねえよ、馬鹿。」

（私にはイズミがいる。）

ひとしきり話が済んでヤスハラは伝票を持って立ち去った。私としてはいい暇つぶしができたくらいに思っていた。結局は警察が解決するだろうと。この時は……

「さあ、まずはヤスハラの今の彼女に話を聞いてみるか。」

話が長くなってしまった。もうイズミの講義も終わっているだろう。家に帰ったらイズミに何と説明しようか。

イズミの心情

「タカちゃん遅い。」

家に着いてすぐに不機嫌な顔をしたイズミが目に入る。どう言い訳をしようか考えていたのに出鼻を挫かれた。イズミは待たされるのが嫌いだ。だから先に帰ったはずの私が自分より遅く帰ってきたことが不満らしい。イズミに言わせれば、「待つ時間は人生のムダ。待つくらいなら遅刻して謝った方がまし。」なんだそうだ。

「悪かったな。用事が伸びてしまつて。」

今さら変に言い訳をしてイズミの屁理屈に言い負かされるのも癪なので私は素直に謝る。

「ん。タカちゃん、プリンは？」

しまった。完全に忘れていた。ヤスハラの話が思いの外シリアスだったせいだ。

「すまん。忘れた。」

イズミはプリンがあれば大抵のことは許してくれる。逆に言えばもしプリンを忘れてしまうと

「はあ？ほんとあり得ないんだけど。人待たせといってお土産もなしとかまじふざけてない？もういい！おなかへった。ご飯作つて。」

……こうなる。今が夕飯時だったから助かったがそうじゃなかった

ら大変なことになっていただろう。危なかった。

「今度買ってきてやるから。イズミはなんか食べたいもんあるか？」

「タカちゃん。」

「……………」

何も聞こえない。何もだ。

「じゃあスパゲッティ。ミートソースのやつ。」

「わかった。すぐ作るから大人しくして待ってる。」

不思議な間があつたがこれ以上イズミの機嫌を損ねたくはない。私は何も言わずに夕食の準備にとりかかる。

「タカちゃん、今日の用事って何だったの？」

夕食の準備をしている私の背中にイズミが話しかける。

「ああ、古い友達から久しぶりに連絡があつてな、少し世間話をしてたんだ。」

「ふん。うちが知ってる人？」

「いや、知らない奴。」

「名前言ってみてよ。」

「ヤスハラ。」

「どんな人？男？女？かつこいい人？」

「男だよ。ていうかどうでも良くないか。そんなこと。」

「うん、まあなんでもいいや。タカちゃんご飯まだあ？」

イズミには自覚しているのかどうかはわからないが相手の事を詮索する癖がある。自分が納得できるまで尋ねてくるので正直なところ直してほしいと思う。

「出来たぞ。ほら、ミートソーススパゲッティ。」

「ん。いただきます。」

「いただきます。」

嬉しそうにスパゲッティを食べるイズミを見ると私まで嬉しくなってくる。

「イズミ、今日は何の講義だったんだ？」

食べるのに夢中なイズミに戯れに話しかける。

「物性物理学の分野で、レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法。」

聞く話題を間違えた。イズミが何を言っているのか私には全くもって理解できない。

「でね、今度の学会でうちのゼミの研究を発表するんだ。タカちゃんも見に来てよ。」

そもそも私とイズミの専門は数理論物理学ではなかったか。私は専門分野だけでいっぱいだったというのに。

「ああ、わかった。」

私に今度の……というか毎回のことだが、イズミの学会の内容を理解できるわけがない。だがどうせ待つなら暖かい部屋の中が良い。

とりあえず明日は休日なのでヤスハラの件で奴の彼女に話を聞いてみるとしよう。イズミと居たいのは山々だが仕方がない。泥船が燃えあがっているのだ。帰りにプリンを買っておけばいいだろう。

「ごちそうさま。」

私も同じタイミングでスパゲッティを食べ終わった。

「ごちそうさま。」

イズミの心情（後書き）

「物性物理学」……物質のさまざまな巨視的性質を微視的な観点から研究する物理学の分野。量子力学や統計力学を理論的基盤とし、その理論部門を物性論と呼ぶことも多い。これらは日本の物理学界独特の名称であるが、しばしば英語の Condensed matter physics（凝縮系物理学）に比定される。狭義には固体物理学を指し、広義には固体物理学（結晶・アモルファス・合金）およびソフトマター物理学・表面物理学・物理化学、プラズマ・流体力学などの周辺分野を含む。

「数理物理学」……、数学と物理学の境界を成す科学の一分野である。数理物理学が何から構成されるかについては、いろいろな考え方があ。典型的な定義は、Journal of Mathematical Physicsで与えているように、「物理学における問題への数学の応用と、そのような応用と物理学の定式化に適した数学的手法の構築」である。

Wikipediaより抜粋。

タカハシの考え

土曜日、ヤスハラの話聞いた次の日、早速ヤスハラの彼女に話を聞く。イズミがいると話が確実にややこしくなるので隣で眠っているイズミが起きないうちに片づけるとしよう。

リビングで朝食を食べ終わり彼女に連絡をする。連絡先は確かヤスハラから聞いておいたはずだ。彼女の電話番号に携帯から電話をかける。

プルルルルル……

（知らない人に電話をかけるのは何年経っても慣れないな。）

「もしもし。」

電話口から若い女性の声が聞こえた。

「もしもし、タカハシと申します。あなたの彼氏のヤスハラの方友人です。彼が関係している事件についてお話を聞かせて頂けませんでしょうか？」

「はあ、構いませんが……」

良かった。少し不仕付けな尋ね方をしてしまったが話は聞けそうだし、かしまるで無関心な言い方が引く掛かる。

「……もし良かったら直接会ってお話を聞きたいのですが今日お時間は大丈夫でしょうか？」

電話で済ませるつもりだったがさっきの返事が気になった。ヤスハラの彼女なのだからそう遠くない所に住んでいるのだろう。しかしイズミにはどう説明しようか。

「では……お昼の4時に綾西大学前駅前の「バロック」という喫茶店でよろしいですか？」

「わかりました。ではまた。失礼します。」

確か「バロック」とは昨日ヤスハラと話をした喫茶店のことだ。やはり彼女もヤスハラと同じくこの近辺に住んでいるようだ。

「タカちゃん誰と話してるの？」

「うわ！」

不意のことで驚いてしまった。イズミは私が起きたことがわかったかのように後を追って起きてくる。いつものことだが今日はイズミに隠れて電話をかけていたので気付かなかった。

「誰と話してるの？」

イズミが訝しげに聞いてくる。

「誰でもいいじゃないか。腹減ってるだろ？なんか作るよ。先に顔洗ってこい。」

慌てて話を逸らす。

「ん。」

イズミが洗面所に向かう。私はイズミの朝食を用意しながらこれらのことを考える。イズミを連れていくと間違いなく話が進まなくなる。どうしたものか。

「洗った。」

「出来たぞ。」

今日は手のかからないトーストとココアである。イズミは苦いものが苦手でコーヒーは全く飲めない。そしてミルクよりはココアが好きだ。もちろんトーストにはバターとたっぷりの砂糖をまぶしてある。

「いただきま〜す。」

「イズミ、すまないが今日は一緒に居れないんだ。」

「なんで?」

イズミが食べるのを止めてこちらを向いている。上手い理由が思いつかない。こうなったらいつそのこと強引に……

「昨日の用事の続きだ。昼から出掛けてくる。夕飯には間に合わせるから。」

「何の用事?そんなに大事なの?ってか一緒に行くし。」

「いや、お前は来るな。話が長くなる。」

「やだ。長くなってもいいから一緒に行く。」

……このままでは埒が明かない。

「とにかく、お前はついてくるな。出掛けるのは2時からだしそれまでは一緒に居てやるから。」

「む。」

イズミの顔に不満がありありと見えるがここで一気に押し切らなければ。

「ちゃんとプリン買ってきてやるから。な？」

「……わかった。でもせっかくの休みなのにどこ行くの？」

「「バロック」だ。」

「ふん。うちの学校前の？」

「ああ。」

どうやらわかってくれたらしい。イズミには悪いが親友のためだ、仕方がない。この埋め合わせもしなければ。

「じゃあまだ出掛けるまで少し時間あるし、さっさとそれ食べてゆつくりしようか？」

「うん。」

機嫌を直したらしいイズミが急いでトーストを食べ始める。

「ごちそうさま。」

「そうだ、食べ終わってすぐに悪いが昼食は何がいい？お前の分だけ作って出掛けるから。」

「ラーメン。」

（またこいつは……）
わかってて言っているに違いない。

「無理じゃないか。作ってすぐ食べないといけないんだぞ。」

「うん。わかってる。だから出掛けるギリギリに作ってよ。」

「わかったよ。そうする。」

イズミのささやかな嫌がらせだろう。だが私は快く受け入れる。これ以上こちらの都合ばかり押し付けられない。

「タカちゃんちゅう。」

「わ！んむ。」

イズミが飛びかかってきた。少し驚いたが今日は特別だ。一緒に居られない分いつも以上に甘やかしてやる。我ながらイズミには甘い。

ヤスハラの彼女

「醤油でよかったか？」

というよりイズミは醤油ラーメン以外食べない。ラーメンを作り終えて私は出掛ける準備をする。

「ん。いただきます。」

「夕飯までには戻るから。」

「それさつきも聞いた。」

イズミがそっけない返事をする。寂しいのだろうか。私だってそう
だ。

「じゃあ行ってくるから。」

「タカちゃん。」

イズミがラーメンを食べる手を止めて呼ぶ。

「どうした？」

「いつてきますのちゅーは？」

「え？」

そんなことをしたことはいままで一度もない。初めてのことで私は

呆氣にとられた。

「ちゅー。」

「んっ。」

（まあたまにはこういうのも悪くないのかもしれない。）

「いつてきますのちゅー」を終えて私は家を出た。

自宅から最寄りの駅へ向かう。今日は昨日より肌寒い。着込んできて正解だ。駅までは近く、歩いて五分ほどである。駅から目的地の綾西大学前駅までは各駅停車だが一本で乗り換えはない。こんなに条件の良い部屋を借りれてよかったと本当に思う。暖房の効いた電車で揺られて少しうとうとしてきた。

「綾西大学前へ、綾西大学前へ。」

駅員のアナウンスではつとずる。危なかった。

駅を出て昨日もヤスハラと話をした喫茶店「バロック」へ向かう。ヤスハラは彼女から話を聞くのは四時からだったはずだ。今は三時半、少し早く着いてしまった。外から覗いてまだいなかったらコンビニかどこかで時間を潰そう。……と思ったのだがヤスハラは彼女が中でコーヒーを飲んでるのが見えた。どうやら彼女はヤスハラ以上に時間に厳しいらしい。少し早いがさっさと話を終えて早く家に帰ろう。イズミが待っている。

「こんにちは。今朝お電話したタカハシです。」

中に入って彼女に声を掛ける。彼女は驚いた様子で、

「え？こ、こんにちは。タカハシさんですか？」

……しまった。今朝の電話では名前を伝えただけで背格好の話をしていなかった。今の彼女には私が超能力者か何かに見えていることだろう。しかしそれならそれで連絡してくれば良かったのに。

「昨日ヤスハラからあなたの連絡先を聞くときにあなたの背格好も一緒に聞いていたので。今朝の電話でお話ししておくのを忘れていました。すみません。」

「そうだったんですか。急に声を掛けられたので驚いてしまって。」

「すみません、驚かせてしまって。それですね、ヤスハラが関わっている事件をどれくらい知っているんですか？」

本題に入る前にもう一度確認する。

「えーっと…彼の前の彼女さんが殺されたとしたか。」

「ええ、その事件です。ヤスハラがその事件の容疑者だということ
は？」

「それも知ってます。でも彼は違います。彼はそんな人じゃないんです。私にはよくわかります。だって彼の恋人なんですから。」

彼女は必死にヤスハラが無実を訴えている。しかしそんな姿がますます逆に今朝の無関心さを浮き彫りにしていく。

「あの……」

「はい？」

私は彼女の話の遮って話しかける。一つとても大事なことを思い出した。

「まだお名前を伺っていませんでしたね。」

「あ！すみません。ハシダと言います。ハシダ ノリコ。」

「そうですね。ハシダさん、ヤスハラと付き合い始めたのはいつからですか？」

「確か……ひと月ほど前からです。」

「最近ですね。」

「そうですね？」

付き合ってひと月なら最近ではないのか。女性の時間の感覚はよくわからない。

「では事件が起こった日、つまり四日前の午後六時頃、あなたは何をしていたんですか？」

「その日は一日、友人と一緒にいました。」

「友達ですか？」

「はい。」

「どこにいたんですか？」

「街をぶらついていました。お買い物をしたり。」

「なるほど。では前の彼女のことはどれくらい知っていますか？」

「そんなに良く知ってるわけじゃ、そんなこと話題にもなりませんし。」

「それもそうだ。前の恋人の話をされて喜ぶ女性はほとんどいないだろう。」

「あ、すみません。ちなみに一緒にいたという友達のお名前は？」

「今度は忘れない。」

「カワハラ チヒロです。」

「仲は良いんですか？」

「ええ、昔からの親友です。」

「まあこんなところだろう。今日はもう帰ろう。」

「わかりました。聞きたいことはこれくらいです。お手をかけました。」

「いえいえ、こちらこそ。」

「では。」

そう言って私は伝票を持って立ち去る。

「あ、ありがとうございます。」

彼女……ハシダ ノリコは礼をする。

「いえ、気にしないでください。」

「バロック」で支払いを済ませ店を出る。その足で駅へは行かずコンビニへ立ち寄る。プリンを買ったためだ。

「ありがとうございます。」

コンビニ店員の挨拶を背に駅へ向かう。夕方になると来た時より一層肌寒い。時間は…良かった、夕飯には間に合いそうだ。

イズミの嫉妬

「ガチャッ。」

おかしい。玄関に鍵が掛かっている。中にイズミはいないのだろうか。私は鍵を開けて中に入った。

「ただいま。イズミ、いないのか？」

少し大きめの声でイズミを呼ぶが返事はない。

「イズミ？」

靴を脱いで中に上がり、リビングや寝室、バスルーム等、部屋中を探す。イズミの姿は見えない。

（あいつどこ行ったんだ？もうすぐ夕飯なのに）

私は携帯を取り出しイズミに電話を掛けることにした。

ブルルルルル……ブルルルルル……

「ガチャッ。」

「イズミ、今どこに……」

「ただいま、電話に出ることが出来ません。ピーと……」

そこまで聞いて携帯を切った。本当にどこへ行ったのだろう。

（とりあえず夕飯を作ろう。夕飯の時間になれば帰ってくるだろう。）

夕飯の準備をしている間もイズミの事が頭から離れない。

「痛っ。」

考え事をしながら人参を切っていたら包丁で手を切ってしまった。イズミがいつ帰ってくるかわからないので今日はカレーにする。

「ばんそうこう、絆創膏…」

調理を中断して薬箱を探し、切った人差し指に絆創膏を巻きつける。

（帰ってきたら文句言ってやらないと。）

自分でも八つ当たりだとわかっているが黙っているのは私の気が治まらない。

「ガチャッ。」

「ただいま。」

イズミが帰ってきたようだ。心なしか声に元気が無い。

「どこ行ってたんだ？携帯にも出ないから心配したじゃないか。」

「しらない。」

イズミが俯いたまま返事をする。本当にどうしたんだ。

「外で何かあったのか？」

「知らない。」

知らない。としか答えないイズミにだんだん腹が立ってきた。

「知らないわけがないだろう。どこ行ってたんだ？」

言い方が自分でもわかるくらいきつくなっている。

「知らない!」

イズミがこちらを睨みつける。その目が赤く腫れているのに気がついた。

「泣いてたのか？本当に何があったんだ？」

「……………」

イズミは質問に答えず寝室へ向かう。

「夕飯食べないのか？プリンも買ってきたぞ。」

「……………リン。」

「え？」

「プリンちょうだい。」

イズミが小さな声で返事をした。やはりプリンの力は大きい。

「夕飯はいらないのか？今日はカレーだぞ。」

「いらない。」

そう言っでイズミは冷蔵庫からプリンを取り出し食べ始めた。

（カレーにしといて良かった。）

「じゃあ私はカレーでも食べようかな。」

イズミに聞きたいことは山ほどあるが少し時間を置いた方が良いでしょう。

「いただきます。」

私はカレーを食べ始める。イズミの口に合わせて作るので味付けは甘口だ。

「……………」

「……………」

沈黙の時間が二人の間を流れる。気まずい。

「だれ？」

プリンを食べ終えテレビを見ていたイズミが唐突に口を開いた。

「何が？」

イズミが何を言いたいのかわからない。

「もういい！だいつきらい！」

声を荒げてイズミは寝室へ向かう。わけがわからない。

（私が何か悪いことしたのか？出掛ける前はあんなに機嫌良かったのに。）

「むゝゝ、むゝゝ、む…」

携帯が振動している。ヤスハラから着信だ。何かあったのだろうか。

「もしもし。」

「おう、タカハシ、もういいぞ。」

「何がだ？」

今日は主語を言うてはいけない日なのか。イズミもヤスハラも説明が足りなさすぎる。

「例の事件だよ。今日警察が来たんだ。それでどうやら俺の疑いは晴れたらしい。」

「なんだ、そのことか。」

警察の捜査力を甘く見てはいけない。そのうち警察が解決するだろうとは思っていたが、私の予想よりもかなり早い。というよりまさかヤスハラは軽く取り調べを受けただけで大騒ぎしていたのではないだろうか。

「なんだとはなんだ。喜べ。俺は無実だ。」

「わかってたよ。最初から言ってたじゃないか、お前はそんなことするような奴じゃないって。」

「そうだよな。お前だけだよ信じてくれてたのは。」

ヤスハラの彼女……ハシダノリコは信じていなかったのか。やはり付き合って一カ月だと所詮この程度なのだろう。

「で？結局犯人は誰だったんだ？」

なんだかんだいっても気になる。

「それがまだわかってないらしいんだ。」

「じゃあどうして疑いが晴れたんだ？」

「なんでもレイコの家の玄関のドアノブから誰だかわからない指紋が出たんだってよ。」

「そんなところ一番に調べるもんなのにな。」

「そんなとこ調べなくてもいいくらいに証拠が残ってたんだろっな。でもあんまり俺が否認するもんだから警察も細かいとこを調べたん

「じゃないか？」

「ふーん。そういうもんなのか。まあなにせよ良かったじゃないか。」

「おう。迷惑かけたな。今度何かご馳走するよ。」

「ああ。期待しないで待ってるよ。」

「じゃあな。」

ヤスハラとの電話を終えて私はほっとした。だが今の私にとってもっと深刻な問題がある。どうやってイズミの機嫌を直そうか。

タカハシの機嫌

「おやすみなさい。」

一人でつぶやいてみる。イズミは先に寝てしまっているので返事はない。いくら喧嘩しても寝室にベッドが一つしかない以上同じ場所で眠るしかない。とはいえ一応押し入れに布団は入っているので本当に嫌われていたら一緒に寝ることさえできない。そう考えるとまだ希望はあるようだ。それにしてもイズミの寝顔は可愛い。普段バラバラに寝ることがないのでこういう機会はなかなかない。私は滅多に見れないイズミの寝顔を見つめる。たまらなく愛おしくなってきた。イズミの額にキスをする。イズミの頭を撫でながらまだ腫れの残るまぶたから赤く上気した頬、そして甘く誘うような唇へとキスの雨を降らせる。

「ん。」

イズミが声を上げる。……まだ起きない。しかしこれ以上をやって本気で嫌われたくはないので私は我慢することにした。続きは仲直りしてからだ。それにしても何が原因でイズミは怒っているのだろう。イズミは時が経てば怒りが収まるような性格ではない。何としても原因を突き止めなければ。

「おやすみ、イズミ。」

もう一度だけ声を掛けイズミの小さな頭を軽く抱きしめる。

日曜日、目を覚ますと隣にいるはずのイズミがいない。時計を見るとまだ六時前である。イズミが早起きするなんて余程の事がないと

あり得ない。逆に言えば余程の事があるのだ。もしかしたらそれが原因なのかもしれない。帰ってきたら今度こそイズミとちゃんと話をしよう。そのためにはもう少し寝ることにする。

「ただいま。」

イズミが帰ってきた。時間は……十一時半、昼食前である。

「おかえり。昼食は食べたのか？」

「まだ。」

「何か食べたいものあるか？」

「なんでもいいよ。」

まだ機嫌は良くないが話は出来そうだ。昼食を食べたら話そう。

「じゃあ少し待ってろ。すぐ作るから。」

「ん。」

といっても昨日のカレーが残っているのでそれを盛り付けるだけだが。

「ほら、カレーだ。」

「ちゃんと甘い？」

「当然だ。」

「わかった。いただきます。」

「いただきます。」

カレーの味付けだが市販の甘口ではイズミは納得しない。さらにリンゴやハチミツを加えた特製の超甘口だ。さらにイズミが食べやすいと言うので水を多めにしている。もはやカレーと呼んではいけないのかもしれない。私も初めは食べられたものではなかったがもう慣れてしまった。

「ごちそうさま。」

イズミが食べ終わる。イズミの好きなものを食べるときの速さには目を見張るものがある。

「ごちそうさま。」

イズミが食器を片づけている間に私も食べ終わった。

「イズミ、朝早くからどこ行ってたんだ？」

食器を洗いながらイズミに話しかける。

「どこでもいいじゃない。別に。」

ダンッ！！

「どうしてもよくない！」

流し台を叩いて叫ぶ。自分でも驚くほど大きな声が出た。イズミの方を見ると明らかに怯えている。

「あ……すまない。びっくりさせたな。でも本当に心配なんだ。な
あイズミ、ちゃんと答えてくれ。どこに行ってたんだ？」

「……嘘つき。」

「え？」

イズミの誤解

「浮気しないって言ったのに。」

イズミが目には涙を溜めて言う。その声から生の感情が伝わる。

「だから何の事だ？」

イズミが何を言いたいのかわからない。私が浮気などするはずもないのに。そのことを誰よりもわかっているのはイズミではないか。

「じゃあ昨日一緒にいた人は誰なのさ！」

イズミがとうとう泣き出してしまった。

（なんだ、そういうことか。）

全てを理解した私は慎重に言葉を選びイズミに話しかける。

「なあ、イズミ、その人は違うんだ。イズミが思ってるような関係じゃないんだよ。」

「ぐすつ…ふえ。」

イズミが次第に大人しくなっていく。

「ヤスハラって覚えてるか？あの人とはな、ヤスハラの彼女なんだ。」

「かのじょ？」

「ああ、そうだよ。一昨日からの用事でその彼女さんと会わないといけなくなっただけなんだ。」

「じゃあ別に連れてつてくれても良かったくない？」

「いや、割と真剣な話だったからイズミがいるとまずいと思ったんだ。」

「なにそれ？ひどくない？」

もう完全に泣き止んだようだ。イズミの顔に笑顔が戻る。

「っていつかついてくるなって言わなかったか？」

言いつけを破った挙句に勘違いされて泣かれてはいい迷惑だ。

「うん。だから着いていかなかったでしょ？」

出た。イズミお得意の屁理屈だ。私は今まで一度もこのイズミの屁理屈に勝てたことはなかった。

「確かに着いてはきてなかったがそれじゃあ結局同じことじゃないか。」

「でも邪魔しなかったでしょ？ってかタカちゃん気付いてた？気付かなかったでしょ？」

なぜか満足げな表情のイズミに少し悔しくなってきた。

「うっ、うるさいな。もういいー！」

「タカちゃん可愛い！ちゅー。」

機嫌を直したイズミが飛びかかってきた。

「ん。」

今日のはいつもより長い。細かいキスを何度もされるとくすぐったくて変な気分になる。

「タカちゃん。」

「ん？」

「用事ってもう終わったの？」

隣で布団に包まっているイズミが聞いてきた。

「ああ。終わったよ。」

私は気だるそうに答えた。

「何の用事だったの？」

（どうしようか。答えてしまっていたいいものか。）

プライバシーの問題が一応はあったが、そもそもヤスハラにプライバシーなどというものは関係なかったことを思い出したので教えてやる。

「ヤスハラの元カノがな、殺されたんだそうだ。それでヤスハラが

疑われてたからあいつの関係者から話を聞いてたんだ。」

「タカちゃん探偵みたい。」

「ああ、そうだな。」

まだ日も暮れていないのに今日は本当に疲れた。このまま少し寝るとしよう。

タカハシの暇潰し

「タカちゃん。起きて。」

「…ん。」

イズミの声で目が覚める。時間は……五時半。夕飯前だ。少し寝すぎたなと自分でも思う。しかしそんなことよりもイズミに起こされたことに傷ついた。イズミだって同じくらい疲れていたはずだ。

（とにかく夕飯の準備をしないと。）

…といっても昨日のカレーがまだまだ残っていたので今度はカレーうどんにするだけなのでそれほど手間ではない。昼間のカレーライスを食べきれると思っていたが作りすぎてしまったようだ。

「タカちゃん。」

イズミが服を着替えながら呼ぶ。

「なんだ？」

ジーンズを履きながら答える。

「まさかカレーうどんとかじゃないよね？」

イズミが恐る恐る尋ねる。

「よくわかったな。夕飯はカレーうどんだ。」

「え〜。カレーもうやだ〜。」

「捨てたりしたらもったいないだろう。昨日お前が食べなかったのが悪い。」

とは言ったがもしイズミがちゃんと食べていたとしてもやはりカレーうどんになっっていただろう。本当に作りすぎた。

「タカちゃんが悪いのに。」

なんで私のせいなんだと思ったが言わない。これ以上付き合ったらまた言い負かされるのは目に見えている。私はまだ後ろで着替えているイズミを放ってカレーうどんを作ることにした。

「いただきます。」

「……いただきます。」

イズミが不服そうにつぶやく。どうやら諦めてくれたようだ。

「タカちゃん。」

「なんだ？」

「もうないよね？」

おそらくカレーのことだろう。私ももうカレーはたくさんだ。幸いあの汁っぱいカレーをほとんどそのまま利用したので鍋の中にカレーは残っていないかった。

「ああ。これで最後だ。」

「良かった。ほんとに。」

イズミがそう言ってカレーうどんをすする。

「ごちそうさま。」

「ごちそうさま。」

もう当分カレーは作らないことにする。もしくはレトルトのものを
買うようにしようと思う。

食器を片づけるのはいつも私の役目だ。言えば手伝ってくれるのだ
が何かヘマをしないかと心配でいつもより余計に時間が掛かってし
まうので私一人で片づけている。さらに言えばイズミに家事全般を
頼むとどれをやらせても確実にヘマをする。買い物頼んだ時には
スーパーに行かず、私が遅いと連絡をするまで通り道にある古本屋
で立ち読みをしていたこともあった。

「タカちゃん。」

「なんだ？」

今日のイズミはいつも以上に甘えてくる。名前を何度も呼ぶのはそ
の証拠だ。

「明日の学会に来てよ。」

「明日学会があるのか？」

明日は月曜日で私は四限までだがイズミは五限までである。いつもならどこかで時間を潰して待つのだが学会があるとなればかなり待つことになるだろう。

「うん。まあ学会って言っても他のグループと研究を発表しあうだけなんだけどね。」

「へえ、そうなのか。わかった。場所は？どこでやるんだ？」

「えっと……確か工学部棟の大講義室。」

なるほど、あの広い大講義室なら潜り込むというか一般の学生にも開かれている可能性が高い。ただ一つ問題がある。

「本当に？」

イズミはひどい方向音痴だ。というよりそもそも場所や道筋を覚えようという意志が無い。私は念のために場所をもう一度聞く。

「たぶん。」

「違ってたら連絡してくれ。ところで何の研究を発表するんだ？」

「レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法。」

……イズミが何を言っているのかはわからないが金曜日の夕飯時に言っていた内容だろう。

「へえ。」

それだけを返して洗い終わった食器を食器棚に戻していく。

「タカちゃん。」

「なんだ？」

「呼んだだけ。」

（こいつ……）

イズミの研究発表

月曜日、四限目が終わって私は工学部棟の大講義室に向かう。昼休みにイズミと弁当を食べながら学会の場所を確認したが間違いはなかった。ついでに確認したのだがやはり一般の学生にも開かれていた。今回は合法的に入れそうだ。

大講義室に入る前に一般学生の名簿に名前と学籍番号を記入する。うちの大学はこういう部分の管理が徹底している。ほかの大学で行われる学会にイズミが行ったことがあるが名簿のようなものはない大学の方が多かった。

中に入るとやはり広い。普段なかなか訪れることがないだけに余計に広く感じられるが、それでなくとも他の大学の講義室よりもかなり大きい。私立だからだと思うがそれにしても我が大学は資金力がある。そしてそれを無駄なところに使う。

例えばこの机。横に長いのは講義室という一度に多くの人間を収容する構造上、当たり前なのだが別に国産のしかもヒノキである必要はないのではないか。机の端にあるメーカーと材質を表示するラベルにはそう書いてある。

もうすぐ学会が始まる時間なのでもうすでに多くの学生や教授、来賓が席に着いている。イズミも壇上右側のさらに右端に座っている。一般席はそれなりに空いているが後ろや端っこの席はほとんど残っていない。私はイズミがよく見えるようにまだ空いている前列右端の席に着いた。

「ただいまより、物性物理学の学識交流会を始めます。」

司会の男性が学会の開始を宣言する。が、私としてはまるで専門外の分野なので交流も何もない。ただイズミを待つのに都合がいいというだけの理由でここにいるのだ。あと真面目なイズミを見たいと

いうのもある。

（イズミが出るまで暇だな。）

前の方の席に座っているので居眠りするわけにもいかず、私は必死に眠気と闘っていた。

「続いて綾西大学、セキ教授のチームによる「レアメタルに似た性質を持つ合金の理論上の合成方法」の研究を発表して頂きます。フルカワ イズミさん、壇上へどうぞ。」

イズミの名が呼ばれた。それまでの眠気など忘れて私は壇上のイズミを見つめる。

「皆様こんにちは。セキ教授の下で研究しているフルカワ イズミです。」

そう言つてイズミが一礼する。やはりイズミはイズミだ。いくら真面目に振舞おうとしても挨拶ただけで不自然な部分が見て取れる。私にとってイズミの真面目な顔は新鮮なので不自然なのは全く構わないのだが他の人間にはどうだろうか。周りを見回してみると苦笑を浮かべている人がちらほら見えた。

「……………であるから、このとき……………」

イズミが何を言っているのか私には全くわからないが真面目な顔で一生懸命になっているのはわかった。そんなイズミも可愛いなど全然関係ないことを考えた。

「理論上の話はこれくらいにして最後に実際に粒子はどういった振

舞いをするのかを説明します。こちらの図を見てください。」

（御覧くださいって言いたいんだろうな。）

天井からスクリーンが降りてきた。A gと書かれた粒とR hと書かれた粒が混ざり合う様子が映し出されている。「おお。」と周りから歓声上がる。どうやらすごいことらしい。

「簡単に説明しますと合金というのは2種類の金属を加熱し液体にして混ぜるという手法が一般的です。しかしその方法では比重の違いすぎる金属同士は混ざりません。例えば水と油のようなものをイメージするといいでしょう。」

イズミがこちらを見ながら言う。もしかして水と油の例えは私のためのアドリブなのか。

「そういつた混ざりにくい金属同士を混ぜるような触媒があれば良いのですが、今回説明した方法では触媒がありません。」

観衆が一同にうなづく。

「つまり2種類の金属をナノテクノロジーで超微細の粒子にして少しずつスプレーのようなもので吹き付けることで均等に混ぜることが可能なのです。」

イズミはさらに続ける。

「私たちのチームはこの方法で実験的にロジウムと銀の合金を作り出すことに成功しました。さらにその合金はレアメタルの一種であるパラジウムに近い性質を持つことも確認できました。周期表的にもロジウムと銀の間にパラジウムは存在することから乱暴に言えば

足して2で割ると言うわかりやすいでしょう。」

イズミの発表が終わりに近いことが雰囲気でわかる。

「最後に近頃の産業技術にレアメタルはなくてはならないものとなつており、その価値は高まる一方です。つまり今回取り上げた理論は、無関係なもの同士を混ぜ合わせて自分にとって都合の良いものを作り出す、さながら現代の錬金術と言っても過言ではありません。」

一瞬イズミと目が合った。なぜか私に向けての言葉のような気がした。

「では以上で発表を終わります。」

イズミが一礼するとどこからともなく拍手が起こった。どこか満足そうなイズミを見ながら私は改めてイズミの凄さを認識する。

「以上で全ての発表が終わりました。皆様長らくの御視聴有難うございました。」

司会が学会の終わりを告げる。私は背伸びをしながら大講義室を出た。

「タカちゃん！」

会場を出てしばらく待っているとイズミがやってきた。

「ん。もついいのか？」

「なにが？」

「同じ研究をしている人達に挨拶はしたのか？すごい評判だったじゃないか。」

素直にイズミを褒めてやると余程嬉しかったのか私の腰に抱きついてきた。少し恥ずかしい。

「そういうのは教授の仕事だから。全部任せてきた。」

「いいのか、それで。」

少し呆れながら張り付くイズミを剥がす。

「いいの。つかタカちゃん意味わかんなかったでしょ？」

「当たり前だ。専門でもないのにわかるわけがない。」

「ちゃんとわかりやすい例えもしてあげたのに。」

やはりあれはアドリブだったようだ。

「……まあそこだけはわかったよ。」

「ほんと？タカちゃん大好き。」

「待て。」

また抱きつこうとしているイズミを止める。

「どうしたの？」

やや不満そうにイズミが言う。

「……………家に帰ってからだ。」

ヤスハラ的事件の結末

火曜日、朝の授業はイズミと一緒にサボった。専門科目の授業ではないしまあ大丈夫だろう。そして今、午後の授業を終えた私はあの喫茶店：「バロック」にいる。ヤスハラに呼び出されたのだ。今回はイズミを連れてきた。また機嫌を悪くされてはたまらない。イズミには一応ベタベタしないよう、そして静かにするように言うてあるが望みは薄い。

「よう。」

ヤスハラが約束の時間ちょうどにやってきた。

「おう。今日はどうした？」

「その前に、お前の隣にいるのは誰だ？」

「フルカワ イズミです。いつもうちのタカちゃんがお世話になってます。」

イズミが場違いな挨拶をする。

「そうか、俺はヤスハラだ。」

「それで？今日は何の話だ？」

早速本題に入る。

「ああ、例の事件だが、犯人が捕まったんだ。」

「本当か？で、誰だったんだ？お前の元カノを殺したのは。」

ヤスハラはコーヒを少し飲んでから答えた。

「俺の今の彼女だよ。ドアノブの指紋が一致したらしい。」

「え？」

私はもう一度聞く。確か彼女は女友達と遊んでいたはずだ。それが事実なら私は嘘をつかれたようだ。

「今の彼女だよ。ハシダ ノリコだ。」

驚きはしたが良く考えてみると、土曜日の電話で話した時の無関心な印象はそういうことだったのか。しかし実際会った時にはあの無関心さは消えていた。私は見事に騙されていたらしい。女というものは恐ろしい生き物だ。

「なんで彼女はそんなことしたんだ？」

「たぶん俺のせいだ。」

「お前まさか前の彼女とよりを戻そうとしてたんじゃないだろうな？」

「いや、そうじゃない。俺がいつまでもレイコと付き合ってた時の物を処分しなかったからだと思う。それであいつ、勘違いして。」

（大雑把な性格がこんなところまで。）

「そんなにお前に惚れてたのか。今の彼女は。」

こいつにそんな甲斐性があるとは思えなかった。が、私に女性の気持ちはわからない。

「正直うんざりしてたんだ。今日はどこ行ってただの今のは誰だなの。」

なるほど。ハシダ ノリコはイズミと程度は違うが同じタイプの間らしい。

「それにしたってショックだっただろう。」

「いや、むしろせいせいしてるよ。ちょうど別れたいと思ってたんだ。」

ヤスハラは厄介事が片付いたというような表情で答えた。

「それは冷たすぎじゃないか？」

この前会った時には気付かなかったがヤスハラは無愛想を通り越していくらか冷たい人間になってしまったようだ。何も変わってないと思っていたがそうではなかった。

「タカちゃん。」

隣で暇そうにしているイズミが呼ぶ。もう頼んだココアは無くなっていた。

「どうした？」

「話終わった？もう帰りたい。」

「ああ、そうだな。」

（もう終わってもいいだろう。）

「ヤスハラ、他に何かあるか？」

「いや、話はもう終わりだ。このあと何か用事でもあるのか？無かったらこの前言ってた……」

「いえ、大丈夫です。お気遣いなく。」

イズミが言い終わる前に言葉を被せる。

「あ、ああ、そうか。悪かったな、急に呼び出して。」

「いや、構わないよ。またな。」

イズミに引つ張られて「バロック」から出る。会計を忘れていたがまあいいだろう。ヤスハラに押しつけてしまおう。

イズミの嘘

「タカちゃん。」

家までの帰り道、イズミが話しかける。

「なんだ？」

「結局タカちゃんは何してたの？」

「それは……」

言われてみればそうだ。私はヤスハラで何も力になれなかった。泥船は脆くも沈没してしまったようだ。私がしたことといえば悩めるヤスハラの話し相手になってやったことぐらいで、そのおかげでイズミとは喧嘩をし、果てには泣かせてしまった。

「タカちゃんはさ、」

言葉に詰まる私にイズミが話を続ける。

「そんなに頭良くないんだから難しいことがあったら直ぐうちに相談した方が良いと思うんだ。」

イズミが地味に毒を吐きながら言う。

「そりゃ確かにお前ほど賢くはないけどさ、私の友人の、しかもかなり立ち入った話にお前を巻きこむわけにはいかないだろう。」

「でも結局話しちゃったよね？もう少し早く話してくれてたら別の道もあつたのにね。」

「まあそうだが……ん？ちょっと待て、別の道って何だ？」

イズミが気になる事を言つたので聞き返す。

「ん？うちそんなこと言つた？」

イズミが柄にもなくしらを切っている。イズミは何か隠しているのではないか。

「今言つただろう、もう少し早く話してたら別の道もあつたつて。」

「ああ、そのこと。だって直ぐに相談してくれてたら喧嘩なんかしなくて済んだのになつて。」

そう言つてイズミは私に笑いかける。少し釈然としないがイズミの話が分かりにくいのはいつものことだし、イズミの考えを読むのは常人の私には不可能だ。

「なんだ、そういうことか。別の道なんて伝わりにくい言い方するなよ。」

「ふふつ。」

イズミが抱きついてきた。まあ家は目の前だし構わないだろう。どうかお隣さんに見つかりませんように。

イズミの嘘（後書き）

ここで彼らの話はおしまいです。しかしイズミがこの事件の間、一体何をしていたのか、そしてイズミの言う「別の道」とは何だったのか、ここから先は本来ならば黙るべき部分です。なぜならここまですが彼らにとっての真実なのですから。

イズミの不安（前書き）

ここからはいわゆる裏話なので第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。

時間は第四話に戻ります。

イズミの不安

土曜日、タカちゃんの「用事」が気になって仕方が無いからこっそりついて行くことにした。

（タカちゃん、何の用事なんだろ。タカちゃんの性格から考えて浮気はあり得ないよね。うちには見せられない秘密があったら面白いな。でも何で隠すんだろ？うちはタカちゃんのどんな部分も受け止めてあげるのに。）

急いでラーメンを食べいつもの駅へ向かう。戸締りは忘れない。駅に着くとホームにタカちゃんの姿が見えた。見つからないように少し離れた別の車両に乗る。たしか行先はうちの大学近くの喫茶店…「バロック」だったはず。今まで一度も入ったことが無かったがそんなことはどうでもいい。

（あれ？タカちゃん降りないの？）

「バロック」へ行くならいつもの駅で降りないといけない。なのにタカちゃんが動かない……というか居眠りしているように見える。

（タカちゃん嘘ついた…？）

そう考えたら急に不安に襲われる。…でもその不安は直ぐに無くなった。タカちゃんが慌てて電車から降りた。うちも見つからないようにそれに続く。

今は三時半。タカちゃんが「バロック」に入っていく。中にいる人を確認したように見えた。タカちゃんが真っ直ぐに席へ向かう。そ

ここで信じられないものを見てしまった。

（タカちゃん浮気してる……！）

向かいの席には綺麗な女の人が座っていた。少し落ち着こうとメニューからココアを注文する。その間も二人の会話に聞き耳を立てる。

（……よく聞こえない。でもこれ以上近づいたら見つかりそうだし……）

あの二人の間に乱入しても良かったけど、もし勘違いだったら死ぬほど怒られるし、それも嫌だ。もう少し集中して盗み聞きをすることにする。

「……一緒に……お買い物……」

「仲は良い……」

「……昔から……」

聞こえてくる断片的な会話を聞いている内に自分が泣いていることに気付いた。これ以上ここに居たくない。会話を続ける二人から逃げるように店を出た。

（……ちゃんと、お店から出てきたらちゃんと話を聞こう。）

出入り口の見える少し離れた所から人の出入りを確認する。先にタカちゃんが出てきた。

「タ……」

声を掛ける暇もないくらいの早足でどこかへ行ってしまった。仕方なく後から出てきた女の人に話しかける。

「あの。」

「はい。何でしょう?」

「さっきまで一緒に居た男性、タカハシの友人のイズミといいます。」

胸が少し痛む。

「はあ、ハシダといいます。」

こつちを疑うような目で見つめるハシダとかいう人は返事をした。

「ついさっき見かけたタカハシの様子がおかしかったので、どんな話をしたのか気になったんです。」

嘘だ。普段通りのタカちゃんだった、何か急いでいたけど。そこまですぐとハシダはタカちゃんとどんな話をしたのか大まかに話してくれた。何かを隠して話しているということは良くわかった。そのあとの他愛のない世間話からハシダには彼氏がいてその人がタカちゃんの友人だということもついでにわかった。ヤスハラというらしい。

（あとはタカちゃんの態度次第かな。）

適当に挨拶を交わしハシダと別れ、帰路についた。途中タカちゃん

から着信があつたが今は話したくない。無視をする。

ヤスハラとイズミ（前書き）

裏話その二。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。
時間は第六話に戻ります。イズミが何をしていたのか。

ヤスハラとイズミ

日曜日、昨日の夕方、タカちゃんと喧嘩してしまった。仕方が無かった。タカちゃんが悪いんだから。

喧嘩の勢いで寝たからとんでもない時間に目が覚めた。時計の針は午前二時を指している。八時間ほど眠っただけで起きてしまった。いつもならあと二時間は眠れるはずなのに二度寝は出来そうにない。

（ん……どうしようかな。）

夕飯は食べなかったがタカちゃんが買ってきてくれたプリンを食べたのでおなかはそんなに減っていなかった。

（あ、そうだ。今のうちに……）

タカちゃんの携帯を探す。昨日聞いたヤスハラという人の電話番号を確認するためだ。他人の携帯を盗み見るのはいけないことだけど今はそんなことにこだわってられない。

（え……と確かこの辺に……あつたあつた。）

タカちゃんは物をなくさないようにいつも決まった場所に置く癖がある。電気を点けるわけにいけないので良く見えないが大体の場所は覚えていいる。タカちゃんの携帯を開き電話帳を検索する。「ヤスハラ」の欄を見るとごく丁寧に住所まで登録してあった。

（とりあえず暇だし行ってみようかな。）

とにかくタカちゃんとあの女の人の関係をはつきりさせておきたいでもタカちゃんに聞いても答えてくれなかったのでこの人に聞いてみるでしょう。

（本当に浮気だったらあれだね。……修羅場。うちそういうの見たことないしそれはそれで面白そう。タカちゃんは渡さないけど。）

ヤスハラの電話番号と住所をメモして出掛ける準備をする。

（とりあえずタカちゃんとハシダって人の関係をはつきりさせてそれから考えよ。ってかまだ二時過ぎだしもしかしたら起きてるかも。）

家を出て駅へ向うが時間が時間だ。終電も無いだろう。駅前でタクシーを拾うことにする。駅前は普段からそれなりに賑っており、うちは夜中に出掛けることはほとんど無いがたぶんタクシーも拾えるだろう。それにしてもこの季節、この時間、寒いに決まっている。寒がりなうちはいつもの以上に着込んできたがそれでも寒い。

（えっと……タクシー、タクシー……）

思った通り駅前に着くとタクシーは直ぐに拾うことができた。

「こんばんは。どちらまで行かれますか？」

まだ若そうな運転手に行先を告げ、到着するまでにこれからの作戦を練る。こんな時間まで仕事ができるのは若い運転手だからだろう。というよりもこんな夜中にお年寄りの運転手に運転して欲しくない。居眠り運転なんてされたらたまったもんじゃない。

「お客さん、着きましたよ。」

「あ、いくらですか？」

「1440円になります。」

「はい。ありがとうございました。」

そう言ってタクシーを降りた。値段的に考えると5km程走ったようだ。住所からは想像できなかったが割と近所に住んでいるらしい。あとはメモを頼りに歩くだけだ。が、それが一番の難関だったりする。

ヤスハラの本音（前書き）

裏話その三。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。
時間は第六話に戻ります。イズミの誤解が解けていきます。

ヤスハラの本音

(みぎ、まっすぐ、ひだり、ひだり、みぎ……)

タクシーを降りて細い路地を歩く。行き道を覚えておかないと帰れなくなってしまう。苦手なのはわかってるけど頑張つて道を覚える。

(ここかな。このアパートの……)

なんとか目的のアパートに着いた。言葉は悪いが「ボロアパート」という言葉はこの建物のためにあると本気で信じてくなる程の見た目をしている。吹けば飛びそうなトタンの屋根に下の方にカビがびっしりと生えた木造の壁。隣の住人の生活音が良く聞こえそうだ。二人同時には決して上れそうにない錆びた階段を上った二階の213号室が「ヤスハラ」の部屋のはずだ。

「おい。」

(つつ!!)

ヤスハラの前で突然声を掛けられて心臓が飛び跳ねる。驚いて後ろを振り返ると一人の男が立っていた。何か用があるのだろうか。よく見るとすっきりとした顔立ちでいわゆるイケメンである。服装に気を使えば歌って踊れる某事務所にも入れるんじゃないか。

「はい、何でしょう?」

少し緊張しながら返事をするとその男の人はぶっきらぼうに答えた。

「俺の部屋に何の用だ？」

どうやらこの人が「ヤスハラ」らしい。酔っている様子はない。もともと無愛想な人なのだろうか。それか自分の部屋の前をうろつろされて苛立っているのかもしれない。まあ何にしてもヤスハラがまだ起きていたのは好都合だ。

「ああ、こんばんは。タカ：ハシの友人のイズミといいます。」

「そうか。で？こんな時間に俺に何か用でもあるのか？」

（「こんな時間」に帰ってきたくせに。）

声の調子から怒っている様子ではない。この人は無愛想なんだなとわかった。

「ハシダさん：という女性を知っていますか？」

早速聞きたいことを尋ねる。

「ああ、知ってるも何も俺の女だ。」

「え？そうなんですか？」

知らないふりをして相手の反応を観察する。

「そつだよ。それがどうかしたのか？」

「ここじゃ話にくいのでとりあえず中に入れてくれませんか？」

相手から申し出てくれるのを待つつもりだったが不意にからっ風に吹かれて気付く。このままだと寒さでおかしくなってしまうそうだ。

「ん？それもそうだな。まあ上がれよ。」

そう言つてヤスハラは部屋の鍵を開けた。彼に続いて部屋に上がると本当に彼女がいるのか疑わしくなるような惨状にまた驚いた。うちのタカちゃんとは大違いだ。

「その辺に座つてくれ。お茶でいいか？」

「あ、ありがとうございます。」

（……でも、これ、どこに座ればいいの？）

「足の踏み場もない」とはこのことだ。下に散らばっている物を端に寄せて座れるだけのスペースを作る。やっとの思いで座ったのと同時にヤスハラが二人分のお茶を持ってきた。足で乱暴に自分のスペースを確保してヤスハラも座る。バサバサツとヤスハラ座った隣に積み上げていた物が崩れたが当の本人は気に留めていない。

「何の話だっけか？」

「えっと、あなたの彼女のハシダさんとタカハシが二人で話しているのを見て話題にしたらタカハシがわけわかんない嘘ついて意地を張るから二人の関係をはつきりさせたいんです。」

かなり誇張した表現だが間違つてはいないし、間違つていても構わない。

「ふーん。なるほど、なるほど。そりゃ、あれだよ。俺が頼んだんだ。」

「えっ？」

「えっとな、良く聞けよ。」

イズミの本質（前書き）

裏話その四。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。
時間は第六話に戻ります。イズミの錬金術。

イズミの本質

ヤスハラは自分が巻き込まれている事件のこと、その解決手段の一つとしてタカちゃんにも相談したこと、それから今の彼女：ハシダとは別れてしまったということまで話してくれた。そこまで聞いてある考えが浮かんだ。

「じゃあそれ全部一気に解決する方法がありますよ。」

「何？どうやるんだ？」

ヤスハラが話に乗ってきた。

「少し残酷な方法ですが。」

「そんなことは構わねえから。早く話してくれ。」

「…その事件の犯人、ハシダさんにしちゃいましょう。」

ヤスハラが顔が一気に陰しくなった。誤解が解けた以上ハシダを追い詰める理由は無い。それでもタカちゃんと喧嘩をしてしまった原因を作った罪は重い。

「何を言ってるんだお前は。そんなことできるわけねえよ。それに…」

「それに？」

「もうその事件は解決してるんだ。」

こちらを馬鹿にするような目で見ている。少し腹が立つ。

「…というと？」

「玄関の内側のドアノブから俺じゃない誰かの指紋がでたらしいんだ。」

「そうですか。それが誰かはまだわかってないんですか？」

「ああ、まだだ。」

「じゃあ大丈夫です。」

静かな語気で相手を飲み込む。

「ん？」

「もしさっき言ったことができたとしたら、どうしますか？」

「どうするって……そりゃあ……まあ、俺としては都合が良いんだろうけどよ、もしばれたら……」

ヤスハラについさっきまでの勢いが感じられない。しかしそんなこととはどうでもいい。重要なのはヤスハラが「都合が良い」と言ったことだ。聞き逃すわけがない。つまりヤスハラ自身もできるなら、そしてばれないのならそれが良いと認めたということだ。

「ばれません。なぜなら警察は、というより人間は一度調べたところをもう一度調べるには何かしらの理由が必要で、調べ方も初めて

の時より煩雑になるものだからです。」

「……もつとわかりやすく言ってくれ。」

「一度調べた場所にならうち一人の証拠が多少残ったとしても理由さえ与えなければ問題は無いということです。そしてより致命的な証拠を与えてやればいいということです。」

「つまり？」

「だからうちがハシダさんの指紋を一度調べた部分、例えばその玄関のドアノブに上書きをすればいいんです。その後もう一度くらい取り調べがあると思いますから、その時に警察を罵りながら「もういちど全部やり直せ。」くらい言ってやればいいんです。」

「でも、どうやって？」

「簡単です。今ここにハシダさんが最後に触った場所や物はありませんか？あとセロハンテープ。」

「ちょっと待ってくれ……えーっと……ああそうだ、ティーカップがあるぜ。今日……っていうか昨日の晩飯の時に使ったやつが。」

ヤスハラがセロハンテープとそのティーカップをハシダの指紋が消えないように持ってきた。

「いつもハシダさんはこれのどの部分を持っているんですか？」

「ここだ。取っ手の上と下をこういう風に。」

持ち方を確認してセロハンテープを慎重に貼り付ける。まだ剥がさない。

「じゃあ行きましょうか。」

「え？どこに？」

立ち上がろうとするとヤスハラが気の抜けた声で尋ねた。

「もちろんその事件現場です。この時間なら警察もまだ来ていないでしょう。」

「あ、ああそうだな。車で行こう。」

有難い。外はまだまだ寒そうだ。それに早ければ早い方が良い。時間は午前三時半だ。

「つと、その前に。」

「ん？どうした？」

車のキーを手にヤスハラが振り返る。

「レイコさんの自宅の合鍵はあるんですか？」

「まだあったはずだ。ちょっと前もそれがもとでノリコと喧嘩したんだ。」

「…そうですか。」

そう言つてヤスハラは合鍵を探し始める。

「お、あつたあつた。」

部屋を出てセロハンテープの貼ったティーカップ、車のキー、レイコの自宅の合鍵を持って車に乗り込む。

「どれくらい掛るんですか？」

「急いで三十分くらいだ。」

（じゃあ着くのは午前四時頃か。つてか帰り道覚える意味無かつたし。帰りも駅まで送ってもらおつと。）

ここに来る前には思いもしなかつた展開に少し慌てている自分がいる。でも自分なら大丈夫だろうという自信もある。大丈夫、大丈夫。

「着いたぞ。降りてくれ。」

車を降りると目の前に立派なマンションがある。ヤスハラのアパートとは段違いだ。台風にも負けない頑丈な屋上にカビどころか汚れ一つない綺麗な白い壁。エレベーターまで付いている。錆びてなどいないし300kgまで耐えられると書いてある。

「ここの上階、十三階だ。」

「そうですか。」

見た目が立派なだけにエントランスにオートロックの扉や防犯カメラがあるものと思つていたがそうでもなかった。こんな時間にすれ

違う住人はペットの散歩に行く人ばかりだ。都会特有の顔を合わせても軽い会釈さえしておけばまず怪しまれることもない。

「ポーン、十三階です。」

エレベーターが目的の階に着いたことを知らせる。扉が開いてすぐに黄色い現場保存用のテープが見えた。まだ警察は来ていない。

「あそこだ。」

「あの。」

先に行こうとするヤスハラを呼びとめる。

「ん？」

「ヤスハラさんはここで他の人が来ないように見張っていてください。」

「わかった。」

本当にわかっているのか怪しいがさっさとやるべきことをやってしまおう。ヤスハラから合鍵とティーカップを受け取りレイコの自宅の鍵を開ける。寒いからと着けてきた手袋が役に立った。自分の指紋が付かないように慎重にドアを開ける。ドアが閉まらないように足で押えながら手袋を外しティーカップのセロハンテープを剥がす。そして剥がしたセロハンテープを玄関のドアの内側のノブに方向に気を付けながら貼り付ける。自分の指紋が付かないように注意しながら、しっかりと指紋が写るように押さえつける。

「ふう。」

セロハンテープを剥がしドアを閉め鍵を掛ける。

（これで良しと。）

あとは警察がやってくれるだろう。ヤスハラと共にマンションを出る。

「駅まで送ってくよ。」

「ほんとですか！？ありがとうございます。」

「ところでさ。」

ヤスハラが車を運転しながら話しかける。

「これで大丈夫なのか？」

「まあ大丈夫だと思いますよ。それから……」

ヤスハラに言うておかなければならないことがある。

「警察に話を聞かれた時にドアノブを調べるとかはつきり場所を言う必要はありません。」

「わかった。」

「あと、また今度会う機会があると思いますが初めて会ったように振舞ってくださいね。」

「ん？わかった。」

時間は午前五時半。駅まで送ってもらったところでヤスハラが口を開いた。

「あのよ。このあとすぐに帰るのか？」

現代の錬金術（前書き）

裏話その四。第一話から第十一話までを先に読むことを勧めます。
時間は第六話に戻ります。イズミの推測。

現代の錬金術

「そうですね、どうかしましたか？」

早く帰ってタカちゃんと仲直りしたい。ちょうど始発の時間だ。

「この事件をお前がどう思ってるのか聞きたいんだ。」

「ん〜……まあいいですよ。どこで話しましょうか？」

この時間に帰ってもタカちゃんは寝てるだろうし。でも外は嫌だ。絶対に嫌だ。

「じゃあ…あそこでいいか？」

ヤスハラは駅前の漫画喫茶を指差した。

「じゃあそこでいいです。」

どこでもいい。寒くなければ。

「で、どう考えてるんだ？」

漫画喫茶の一室、ペア席を借りる。レジの店員に白い目で見られたが気にはしない。

「どこから聞きたいんですか？」

質問が漠然としすぎて話にならない。

「そうだな…じゃあこの事件の犯人は誰だと思っ？」

「ハシダ。」

「そうじゃなくて。真犯人だよ。」

ヤスハラがこちらを睨む。少しふざけただけなのに。

「ん…たぶんストーカーです。犯人は男の人が複数でレイコさんの知り合いに怪しい人がいなくてレイコさん人気者ですから。」

「警察も言ってたんだがなんで証拠もないのに犯人が絞れるんだ？」

「確か…レイコさんは自宅で殺されてたんですよね？」

「ああ。」

「で、争った痕跡がなかった。」

「ああ、そうだ。」

「さらに知り合いに怪しい人がいなくて…」

「良い女。」

ヤスハラが合いの手のように続ける。

「そう。だからレイコさんと知り合いじゃなくて、お金目的じゃなくて、男の人なんです。」

「だからストーカーなのか。」

「はい。」

「いや、そこじゃなくて、部屋が荒らされてなかったら何で男が複数なのかを知りたいんだ。」

「ああ、知り合いでもない人間が襲ってきたら抵抗しますよね？なのに部屋が荒れないのは一方的に殺されたからだと思うんです。」

「なるほど…それで腕力の強い男が複数なのか。ん？じゃあノリコ一人じゃ無理があるんじゃないか？」

「そこも大丈夫です。あ、忘れてた。」

とても大事なことをヤスハラに言っておくのを忘れていた。

「何だ？」

「普段履かない靴持ってますか？持ってたなら防犯カメラに映るようにハシダさんに捨てさせてほしいんです。」

「ああ、足跡な。わかった、そうするよ。」

「あと一つ、これはあんまり関係ないんですけど…」

「ん？」

「ハシダさんの友達も共犯とかで捕まるかもしれないんです。」

ヤスハラが顔が陰しくなる。

「お前今まで黙ってたのか。」

「はい。言つと断られると思いましたから。」

ヤスハラが苦虫を噛み潰した様な顔をする。が、しばらくすると観念したのか普段の顔に戻った。

「それから……」

「まだあるのか？」

縋るような声で尋ねる。

「漫画読む時間あります？」

びつくりするほど気の抜けた顔でヤスハラが答える。

「俺はもう眠いんだ。今日はここで寝ようと思って昼まで取ってるよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9306p/>

現代の錬金術

2011年2月28日09時58分発行